

## 教育実践報告

### 古陶磁の鑑賞

#### —美術館から小学校へ、小学校から美術館へ—

Educational practice report

Appreciate of the antique ceramic:

Museum educator introduces antique ceramics to schoolchild in elementary school, and introduces that the result they appreciated those ceramics in school to visitors in museum.

小川 裕紀

(愛知県陶磁美術館 主任学芸員)

OGAWA Hiroki

#### 概要

古陶磁を鑑賞する行為には、長い歴史がある。一方、今日の美術教育・鑑賞教育では、対話型鑑賞が盛行している。現在、両者は別個に行われ、交流等は認められない。本稿ではこれに対し、両者を用いた古陶磁鑑賞の新たな視点と実践について報告する。

本実践の基本的視点は、古陶磁作品の造形には制作技術や造形思考、制作時の受容から後代の賞玩にいたる様々な情報が蓄積していて、鑑賞とはそれらを読み解き・継承するとともに新たな価値を付与する行為だと位置付けることである。本実践では、博物館資料である古陶磁作品の閲覧履歴(ヒストリー)に小学校の児童と来館者が参加することによって、作品を媒介とした集合知の歴史的な形成を目指している。

#### 1 本稿の目的 (註1)

愛知県陶磁美術館は、愛知県が直営している、陶磁専門の美術館である。同館は、学芸員が愛知県内の小学校へ陶磁作品を持参し、教員とともに体験型の授業を行う「学校出前講座」を開催している(註2)。同講座のうちプログラム「やきものの鑑賞」は、小学5・6年図画工作科における「鑑賞」の学習と関連した構成・内容である(註3)。

2014年・学校出前講座「やきものの鑑賞」では、愛知県の歴史的な古陶磁について、児童が形・色や素材感などの造形要素を把握し、イメージを展開することを通じて、古陶磁作品のよさや美しさを感じ取ることをねらいとした。教材は陶磁美術館が所蔵する作品と、専用ワークシートを用いた。授業は、今日の美術鑑賞教育における対話型鑑賞法と、歴史的な

古陶磁鑑賞の方法によって展開した。

古美術作品は、制作時から現在にいたる長い歴史の中で、多くの人々によって様々な視点から鑑賞されてきた。本実践における児童による鑑賞学習活動も、その歴史の一部を構成するものである。授業後には、児童の学習成果を美術館の展示に還元し、作品に対する判断の蓄積を現在及び未来の鑑賞者に伝えて、作品の文化的な価値を継承かつ創造することを目指している。

本稿では、愛知県陶磁美術館 2014 年・学校出前講座「やきものの鑑賞」と、同講座の成果を還元した同館・南館 2 階常設展示室特集陳列コーナーの概要を紹介する。陶磁美術館の古陶磁鑑賞教育の取り組みを題材として、鑑賞教育と古陶磁鑑賞の新たな在り方について提案したい。

## 2 小学校で古陶磁作品を鑑賞する

－愛知県陶磁美術館 2014 年・学校出前講座「やきものの鑑賞」－

科目名称 小学校図画工作科

題材名称 愛知県の古いやきものを鑑賞する

対象学年 5・6 年

時間・会場 1 時間(本時のみ)、小学校(学級の教室以外の教室、特別教室類)

### 2-1 題材の趣旨

愛知県尾張地域を代表する陶磁－瀬戸焼・常滑焼の初期製品と、同三河地域を代表する古陶磁－渥美焼の同時代製品を用いる[画像 1-4]。これらは、産地によって陶土が大きく異なり、製品の材質的・造形な特徴に制作地の違いが表れている。地域の歴史的な陶磁作品を扱うことで、地域への親しみをもたせることをねらう。また、古陶磁は長い鑑賞史と伝統的な鑑賞法があることから、今日の対話型鑑賞法を踏まえつつ、鑑賞行為の歴史性を体験的に学習することを目指す。なお、上記の実物教材のほか、本講座用に制作したワークシートを用いる。[画像 5]

### 2-2 指導目標と評価の観点

- ・陶磁作品の材質的・造形な特徴を捉えることができる
- ・陶磁作品の造形な要素からイメージを展開し、表現することができる
- ・陶磁作品のよさや美しさを、伝統的な鑑賞方法を体験しながら感じ取っている

### 2-3 題材の展開

#### 2-3-1 導入：陶磁の材質と造形

現行製品の陶器と磁器等を比較し、硬度等の材質的な特徴と形状・色調等の造形的な違いについて気づかせて、陶磁鑑賞の基礎的知識について学習する。[画像 6] (註 4)

ここでは、土器・陶器・炆器・磁器の同径の中皿を提示する。打音を聴取することを通して、硬度の違いを理解させる(土器・陶器の打音は低音、炆器・磁器の打音は高音となる)。また、口縁部の形状の違い－土器や陶器は厚作りであるのに対し、磁器は薄作りとなることなど

ーに気付かせ、材質の違いが形状の違いとなって表れていることに注意を向ける。こうした陶磁の形状の違いに気付かせることで、本時展開部の活動へと繋げる。なお、本導入では教材観察により気付いたことを児童各自が自由記入する活動を設定しており、児童のより主体的な教材観察を促している。

## **2-3-2 展開：古陶磁作品の鑑賞**

### **2-3-2-1 展開1：造形要素の把握**

作品1(常滑壺)を任意の角度からスケッチし、その理由を記述・発表する[画像7・8]

ここでは、会場床面に作業用マットを敷き、その中央に作品1(常滑壺)を設置する。作品1は焼成時に形状の歪みと不定形な自然釉が生じていて、見る角度によって全く異なる形状・色彩を呈している。まず、児童に作品1を周囲から観察させ、各児童が任意の角度から作品1をワークシートにスケッチするよう促す。その際には教員や学芸員が児童に、“自分だったらどの向きに飾るか考えてみよう”といった声かけを行い、児童がスケッチする角度を選択しやすいように支援する。

スケッチの進行に伴い、スケッチ角度選択の理由についてワークシートにメモするよう促す。その際には教員や学芸員が児童に、作品の形状や色調の要素によって他の児童に説明できる形で記述するように指導し、児童のメモ活動を支援する。なお、児童のスケッチ・メモ活動の進行管理は、教員・学芸員が共同で実施する。

次いで、スケッチ・メモの結果を各児童に発表させる。児童が作品1の周囲に展開していることから、教員が方向別に児童を適宜指名して発表させる。多くの児童は色調(「緑のがたれていて、かっこいい!と思った。緑と白いもようがいつきに見えるから。」)=自然釉などに注目しているほか、全体の形状(「かたちが1番きれいになっているような気がした」)に注意しており、立体造形である陶磁作品を全体の形状と色調の要素によって把握されていることが窺える。

学芸員は児童の発表毎に作品1を用いながら発表内容を復唱して他の児童とともに確認するとともに、児童が注目した造形要素の意味内容について説明する(自然釉は、焼成時に偶然生じたものであることなど)。これは、児童の鑑賞内容を他児童・教員・学芸員が受容するとともに、作品の造形要素から造形技術や造形思考へ児童が思考を展開するよう促すための指導活動である。

本活動のまとめとして、児童によって作品1の観察角度が異なったことに注意を向け、同一作品に対面しても作品の鑑賞内容は児童によって異なることを指摘して、児童自身の考えの多様性への気づきを促す。これに併せて本活動のような、作品観察において任意の角度を選ぶことは陶磁の伝統的な鑑賞法の一つであることにも触れ、鑑賞行為の歴史性について理解を促す。

### **2-3-2-2 展開2：造形要素の比較**

作品1と2(渥美壺)の共通点と違いについて、気づいたことを記述・発表[画像9]

ここでは、会場床面の作業用マットに作品1(常滑壺)と作品2(渥美壺)を設置する。作品1と作品2はともに12世紀代に制作されたほぼ同形・同サイズの壺である一方、生産地の違い―素地土の違い(前者が知多半島、後者が渥美半島)があることによって、形状・色調に共通点と相違点が生じている。まず、児童に両者を観察させ、これらの共通点と違いについて気づいたことをワークシートにメモさせる。その際には前項同様、教員や学芸員が児童に、形状や色調の要素によって他の児童に説明できるよう記述するように指導し、児童のメモ活動を支援する。

次いで、メモの結果を教員指名によって各児童に発表させる。児童は本活動で両作品の共通点について全体の形状を挙げたほか、両作品とも形状に歪みがある点を指摘したものが多し。また、両作品の違いについて多くの児童は細部の形状(「あつみ焼きの方がごつごつしている。」、色調(「渥美のほうは、黒色や茶色とかしかなないけど、常滑のほうは、白色や緑色などいろいろ色があつた。」)を挙げたほか、素材感(「常滑はつるつるして、渥美はざらざらしている。」)を指摘している。実物教材の詳細な比較観察によって、陶磁作品の形状・色調や素材感を的確に把握していることが窺える。

学芸員は児童の発表毎に作品1・2を用いながら発表内容を復唱して他の児童とともに確認するとともに、児童が注目した造形要素の意味内容について説明する。本活動では、特に生産地の違い―素地土の違いについて児童の注意を促す。陶磁が土を成形・焼成して作られていること、素材・材質と形状・色調が関係しながら造形されていることを理解させる。併せて、ほぼ同形・同サイズ・同時代の作品であっても、作品から引き出されるイメージが異なることを指摘して、次項の活動展開へと繋げる。

### 2-3-2-3 展開3：イメージの展開

作品3(瀬戸壺)の造形的要素から引き出されるイメージについて概観[画像10]

ここでは、会場床面の作業用マットに作品1(常滑壺)と作品2(渥美壺)に加え、作品3(瀬戸壺)を設置する。児童に作品3を観察させ、本作品から引き出されたイメージをワークシートにメモすることを基本とする。教員や学芸員が児童に、素地土の素材感(肌合い)、曲面形状、色調、サイズ等からどのようなイメージが引き出されるかといった声かけを行い、児童のイメージ展開活動を支援する。

児童の記入例としては「整った形がいい。色は白くて気持ちがおちつく。」がある。本活動は本授業において最も難度が高く、筆者が現在確認している限り、ワークシートへの記入状況は思わしくない。今後、本項では学芸員・教員によるイメージの例示をより多く行い、児童の鑑賞活動を一層支援することとしたい。なお、本項は本授業における時間調整用事項であり、児童による発表は行わず、学芸員が作品3の造形要素を確認して造形技術等を概説するにとどめることが多い。この段階では児童の前に作品1～3が並列展示されていることから、各作品の造形要素の比較と、展開されるイメージの違いについて注意を促し、次項・まとめの活動へと繋げる。

### 2-3-3 まとめ：古陶磁作品の歴史的鑑賞

作品 1-3 の内、お気に入りの 1 点を児童各自に選ばせ、題名を付け(伝統的な古陶磁鑑賞法の「命銘」)、その理由を簡潔な文章によって表現・発表させる[画像 11]

ここでは、児童により主体的な鑑賞活動を促すことをねらいとしている。児童が作品を選択してワークシートに題名や理由を記入する際、教員・学芸員は児童に対して、作品のどのような造形要素から題名を付けるに至ったのかを説明できるように考慮して命名するよう投げかける。これは、造形要素への注目と命名活動を通して、学習活動のゲーミフィケーションを促すための支援でもある。

次いで、メモの結果を教員指名によって各児童に発表させる。児童による命名例では、作品 1 について「カラフル」(色がばらばらでこせいてきだから。)、 「もようをつぼ」(もようがへんなもようでおもしろいから。)などが発表された。作品 2 を選択する児童は少ないが、「つつちー」(土っぽくて、落ちついていそうなイメージがある。)が発表されている。作品 3 を選択する児童が最も多く、「記録の地平線」(きれいで、うっとりしてくるし中をのぞくと地平線のように思うから)、「女性」((略)小さくゆるやかな形で口も小さいので女の人を思いうかべました)などがある。児童によって着目点は異なるが、概ね作品の造形要素からイメージを展開しながら、作品のよさや美しさを感じ取っていることが窺える。

学芸員は児童の発表毎に、該当作品を用いながら発表内容を復唱して他の児童とともに確認する。本授業ではこれまでの活動で既に各作品の造形要素や造形技術等について確認していることから、本活動では各児童が作品の造形要素から感じ取った「よさ」について児童・教員・学芸員が気付き、共感・共鳴することを活動の中心とする。この活動は、愛好者における古陶磁の楽しみをなぞることではなく、作品の造形要素からよさや美しさを見出すことを知的ゲームとして楽しみことである。

本授業のまとめとして、学芸員は各児童が作品の「よさ」を感じ取るために用いた視点、すなわち造形要素を把握する方法やイメージ展開の仕方を振り返り、児童が今後の日常生活においても鑑賞活動を展開できるように動機付ける。これに併せて本活動のような、陶磁作品に名前を付けることは陶磁の伝統的な鑑賞法の一つであることにも触れ、鑑賞行為の歴史性について理解を促す。

## 2-4 解説

これまでの古陶磁鑑賞史において、「よい」とされてきた古陶磁作品は、どこが「よい」のか。

作品の「よさ」を感じ取る視点・方法を、伝統的な鑑賞法と今日の対話型鑑賞法に、児童が主体的に取り組むことを通して、体験的に学習する。伝統的鑑賞法の体験を通じて鑑賞の歴史性や歴史への参加意識を持たせるとともに、プロダクトデザインへの関心付けや、今日の「集合知」へ関連付ける展開も可能である。

## 3 鑑賞の歴史を積み重ねる

—愛知県陶磁美術館・南館 2 階展示室 特集陳列コーナー—

展示名称 「古陶磁の鑑賞—小学生の鑑賞学習活動—」(註5)

対象学年 小学校高学年以上

展示会場 愛知県陶磁美術館 南館2階展示室 展示ケース No8[画像12]

### 3-1 展示の趣旨

過去の鑑賞者(ここでは、小学校の児童)が陶磁作品から見出した価値・美を、現在の鑑賞者(ここでは、美術館への来館者)に伝え、自分たちとの共感点を探りながら新たな価値・美を引き出して、未来の来館者へ作品とともに鑑賞の蓄積を伝える。

### 3-2 展示の構成と作品

学校出前講座「やきものの鑑賞」で教材として用いた古陶磁作品3点を、児童が学校で記入したワークシート(コピー)とともに、常設展示室の展示ケース内で展示紹介する。[画像13-15](註6)

### 3-3 展示工作物・配布物

#### 3-3-1 展示

概説パネル(学校出前講座「やきものの鑑賞」の概略紹介)

写真パネル(学校出前講座「やきものの鑑賞」の授業概況)

概説キャプション(学校出前講座「やきものの鑑賞」の概略、展示紹介校名の明示)

基本キャプション(作品の名称・産地・時代)

ワークシート(学校出前講座「やきものの鑑賞」の未使用紙)

ワークシート(学校出前講座「やきものの鑑賞」の児童記入紙のコピー)

#### 3-3-2 配布

解説鑑賞シート[画像16・17]

### 3-4 解説

博物館の展示とは、博物館資料を媒介とした情報発信と交流の文化的装置である。

博物館資料の閲覧履歴(ヒストリー)に博物館利用者が主体的に参加することを通して、博物館は博物館資料が含有する社会性と歴史性を博物館利用者に分与することができる。これは、近代国民教育のみならず、現代の多文化教育やシティズンシップ教育の一端を担うもので、博物館の重要な公教育機能の一つである。

## 4 提言

### 4-1 美術館・鑑賞教育に対する提言

美術館をめぐる鑑賞教育においては、従来は美術史研究の成果を伝達する鑑賞教育が主流として展開してきた。一方、今日では、鑑賞者が作品から自由にイメージを展開し、その内容を鑑賞者同士で伝え合う「対話型鑑賞」が盛行している。

対話型鑑賞はシティズンシップ教育への展開を念頭に、現前の鑑賞者同士の交流に重点が置かれる傾向があるようだ。しかし、対話型鑑賞をより内容豊かなものとするためには、作品に対する過去から現在に至る鑑賞の蓄積や解釈の積み重ね—閲覧履歴(ヒストリー)へ

の着目が有効ではないだろうか。鑑賞作品を通じて、現前の鑑賞者同士のみならず、過去の鑑賞者とも交流を図るのである。

美術館・鑑賞教育の使命が、個人の感性・知性を高めることを通じて、豊かなで創造的な地域社会の実現を図ることにあるとすれば、鑑賞においても個人性だけでなく社会性を重視する必要があるだろう。社会とは一定の時間性・歴史性を有するものであるから、鑑賞においても鑑賞の蓄積や解釈の履歴への注意が必要ではないだろうか。ややもすれば利他的で独りよがりになりがちな鑑賞行為に対し、鑑賞史を通じて社会性を強化することを提案したい。

#### 4-2 古陶磁鑑賞に対する提言

古陶磁の鑑賞は中世の唐物賞玩や茶陶古陶磁に始まり、近代以降は鑑賞陶器・民藝運動・骨董趣味から陶磁史研究、比較陶磁文化論の視点から展開されてきた。これらは各時代の社会・文化の中で成立し、後代へ引き継がれてきたものである。(註7)

いま、古陶磁鑑賞はこんにちの社会・文化—ポスト戦後期、すなわち経済の高成長が終わり、格差と貧困が再顕在化した「バブル崩壊以後」の歴史的条件に適したものとなっているだろうか。管見の限りでは、現在の古陶磁鑑賞の多くは、諸先学によってこれまでに積み上げられたものを継承するのみの伝統芸能と化しているように思われる。古陶磁鑑賞の現代的な意義を考え、アップデートすることが必要ではないだろうか。

筆者が提唱する古陶磁鑑賞の現代的な視点と意義は、以下の2点である。

第一は、古陶磁を文化資源として位置付ける視点である。古陶磁は過去の様々なコンテンツを記録しているメディアであり、歴史的・地理的な文化の多様性を読み取ることができる文化資源である。過去と現代を直線的に結びつける画一的な歴史像ではなく、現代社会を相対化して捉える参考視点—異文化としての過去を把握するための資源として古陶磁を活用することによって、近代国民国家ではなく現代の多文化共生社会をより豊かなものとするができるであろう。

第二は、古陶磁をアートワークとして位置付ける視点である。古陶磁は現代の人と社会において日常では見失われがちな諸相を、造形要素とコンテクスト—歴史性によって人々に明示するアートワークである。形・色や質感の多様性が、様々な鑑賞史・視点を含む重層的なコンテクストと相まって知性と感性を強く刺激する素材として古陶磁を活用することによって、政治的シティズンシップ—同質的ではない異質な他者との関わりや対立、葛藤のある状況での政治的判断力の養成に繋がるであろう。

### 5 今後の課題

陶磁専門美術館においては、「やきものは身近なもの」という言説が時折見受けられる。しかし、それは嘘だ。陶磁が身近に存在していても、それを身近なものとして意識している人は少ない。学校出前講座を実施するにあたり、筆者は小学校教員から「子どもにとってやきものは身近なものではない」との注意を何度も受けたし、家庭に陶磁製食器が全くないとい

う児童にすら何人も出会った。一方で、教員からは「美術的なやきものは、どこがよいのか教えてほしい」という意見をたびたび受けたし、授業で児童に教材として用いた陶磁の評価額を教えると一様に驚嘆の声があがった。

いったい、古陶磁は何の役に立つのか。公立の陶磁専門美術館は陶磁愛好者向け施設ではなく、近代市民社会の社会教育機関である。利用者と地域社会へ情報発信すべきことは、愛好者同士にのみ通じる古陶磁のよさ、美しさではなく、美しい古陶磁の誰もが理解できる条件と機能であろう。同時に公立の陶磁専門美術館は、市民の古陶磁鑑賞リテラシーを向上させることが近代市民社会の維持と再生産に貢献するということを、地域社会に対して実践を通して情報発信する必要がある。陶磁技術史や陶磁文化史といった「大きな物語」を提供すれば事足りる時代など疾うに終わっているのだ。

美しい古陶磁とは、土という素材の性質を活かして確かな技術で造形され、形と色、質案さらには経年変化が調和しているものである。優れた陶磁は作品の造形要素から造形技術、造形思考へと、制作時の受容から後代の賞玩へと、鑑賞者が無限にイメージを展開することができる。このイメージ展開を通して個々の鑑賞者に独創性と普遍性のある視点と思考を齎しめることが、名品の機能である。残念ながら、本稿で紹介した愛知県陶磁美術館 2014 年・学校出前講座「やきものの鑑賞」と特集陳列「古陶磁の鑑賞」は、古陶磁のこうした価値を児童・教員へ十分に伝えるには未だ至ってはいない。

しかし、陶磁を身近なものとは思っていない児童・教員、すなわち普通の人たちへ美しい古陶磁の条件と普遍的な機能を伝え続けることによって、古陶磁はこんにちの近代市民社会において現代的な存在意義を獲得することができる。その取り組みには果てがないであろう。古陶磁を、人々を過去・現在・未来の人、社会、自然と繋ぎ、多様性ある他者と自己を確認するメディアとして機能させる。古陶磁鑑賞は、多様性と歴史性のある他者と自己を承認する営みのロールモデルとして、現在の社会において普遍的な価値を占めることができると確信する。(註8)

## 謝辞

本実践は、美術館と小学校の連携事業である。本稿で紹介した通り、学校における授業は学芸員と教員が協同で進行と指導を行っている。児童への発問や指導の技術等について、本実践をともに実施した教員各位から直接的・間接的に様々な教示を頂いた。また、授業の構成については、愛知県美術館・鑑賞学習交流会ワーキンググループ参加教員各位から数々の有益な提案・意見を頂いた。なお、本実践において学芸員と教員はファシリテーターであり、活動の主体は各児童である。児童の活動・発言が、本実践の実施と改訂に大きく資している。本実践にともに取り組んだ児童・教員各位に感謝いたします。



## 註

1 本稿は、2014年4月26日に愛知県美術館で開催された「鑑賞学習交流会」における筆者の発表資料「古陶磁の鑑賞－美術館から学校へ、学校から美術館へ」を大幅に加筆したものである。

2 2014年度末現在、愛知県陶磁美術館が小学校と連携して実施している学校出前講座のプログラムには本稿で紹介する「やきものの鑑賞」のほか、「愛知のやきもの」(4年社会科関連)と「やきものの歴史」(6年社会科関連)がある。「愛知のやきもの」については拙稿「教育実践報告 愛知県陶磁資料館「出前博物館」－公教育としての博学連携活動－」『愛知県陶磁資料館研究紀要』17号 2012年3月で紹介した。同報告後にも実践は継続し、学習内容を断続的に改訂していることから、同実践については後日稿を改めて最新の取組内容を紹介したい。

なお、愛知県陶磁美術館は2013年6月に、従来の愛知県陶磁資料館から現行名称へ館名を変更した。これに伴い、学校出前講座は2013年度に、従来の出前博物館から現行名称へ事業名を変更した。本稿では名称変更前の事項についても、全て現行名称によって記載する。

3 学校出前講座「やきものの鑑賞」及び関連する校外事業の実施歴は以下の通りである。

- ・2011年2月23日：名古屋市立白沢小学校 第4学年3学級
- ・2011年9月14日：尾張旭市立渋川小学校 第6学年3学級
- ・2011年10月12日：新城市立鳳来寺小学校 第3-6学年(複式学級)
- ・2013年8月27日：名古屋市立桶狭間小学校 図工ボランティア部(校外事業)
- ・2013年10月23日：瀬戸市立掛川小学校 第5-6学年(複式学級)
- ・2013年11月20日：常滑市立三和小学校 第5学年1学級
- ・2014年1月22日：津島市立神守小学校 第5学年2学級
- ・2014年11月5日：津島市立神守小学校 第5学年3学級
- ・2014年12月4日：長久手市立市が洞小学校 第5学年4学級

なお、鑑賞教材は実施年や実施校により異なる。

- ・2011年 白沢小学校  
伝加藤民吉・染付山水図大花瓶(19世紀)、河本五郎・染付歌垣祝瓶(1983年)、  
四代加藤作助・鳴海織部扇面鉢(1990年)
- ・2011年 渋川小学校  
美濃・黒織部茶碗(17世紀)、中国景德鎮・青白磁唐草文碗(12世紀)、  
塚本快児・青白磁華彫水盤(1980年前後頃)
- ・2011年 鳳来寺小学校  
信楽・壺(16世紀)、中国景德鎮・青花宝相華唐草文壺(16世紀)、韓国・白磁壺(18世紀)
- ・2013年 桶狭間小学校・掛川小学校・三和小学校  
韓国・柳文梅瓶(高麗時代)、瀬戸・灰釉牡丹文瓶子(14世紀)、黒田泰蔵・白磁花瓶(21世紀)

・2014年 神守小学校(計2ヶ年度)・市が洞小学校

常滑・甕(12世紀)、渥美・壺(12世紀)、瀬戸・灰釉瓶子(12世紀)

4 本稿の画像5-10は、2013年度・津島市立神守小学校第5学年2学級における取組である。また、本文中において引用紹介したワークシートにおける児童記入例も同校における活動の成果である。

5 特集陳列「古陶磁の鑑賞—小学生の鑑賞学習活動—」は2014年1月末から開始しており、2015年12月末まで開催する予定である。2016年1-2月に南館のリニューアルを行う予定であり、3月以降の展示については現在未定である。なお、2014年には本展を約7千人の観覧に供した。

6 2014年1月から12月までは、2013年度・津島市立神守小学校第5学年のワークシート(コピー)の一部を展示紹介した。2015年1月からは、上記に加えて2014年度・同校のワークシート(コピー)の一部を展示紹介している。

7 拙稿「愛知県陶磁資料館 「美の発見—古陶磁鑑賞の成立と展開—」展より」『陶説』702号 (社)日本陶磁協会 2011年9月

8 2015年度は、弥生土器・壺(1-3世紀)、常滑・壺(12世紀)、加藤清之・瀬戸灰釉壺(2005年)を教材とし、弥生土器・壺の鑑賞成果については2016年度企画展において展示紹介することを予定している。



画像 1

作品 1：常滑

平安時代末期 (12 世紀)

高さ 32.8cm



画像 2

作品 1 の反対面



画像 3

作品 2：渥美

平安時代末期 (12 世紀)

高さ 35.0cm



画像 4

作品 3：瀬戸

鎌倉時代初期 (12 世紀末)

高さ 25.5cm

**名前**

香取県期間延長研修会・学校出前講座  
**やきものの鑑賞**

**伝統的な焼き物の分類**

焼成温度	色	透明度	特徴	水の強さ	匂い	強度	気付いたこと
① 土器 700~1000℃	こげ茶色 黄土色	不透明	だたくとにひびきが入れるとがずる	水を入れると水がもる	弱	弱い	
② 陶器 1000~1300℃	白 灰白 赤茶色	不透明	にひびき	水がしみみる			
③ 磁器 1100~1300℃	灰白 赤茶色	不透明	金属的な	水がしみない			
④ 磁器 1200~1400℃	白	半透明	金属的な	水がしみない	強い	強い	

**焼き物の鑑賞**

よく見て、よく考えよう！


- ① 作品を、さまざまな角度から、よく見てみよう。どの形・色・模様が一番気に入った？
- ② 作った人の、技術と考え方を想像しよう。自分や、他の人は、どう思ったでしょう？

**焼き物の鑑賞 (1)**


作品を、さまざまな角度から見て、気に入ったところから、絵を塗っていきましょう。

古い焼き物を鑑賞し、驚くことは、日本では新石器時代から行われてきた。

**焼き物の鑑賞 (2)**



美濃  
美濃半瓶では、12世紀から13世紀にかけて、焼き物を作っていた。この作品は、20世紀の作品で、美濃半瓶で作られてから半世紀以上経った。この作品は、美濃半瓶で作られたものである。



瀬戸  
瀬戸に特徴的な白っぽい灰色の粘土に、深い緑色の釉薬が施されています。この作品は、瀬戸で作られてから半世紀以上経った。この作品は、瀬戸で作られたものである。

形と色、模様を注目！

2つを比べると、異なっているところはありますか？


2つを比べると、異なっているところはありますか？

形と色、模様を注目！


2つを比べると、異なっているところはありますか？

**焼き物の鑑賞 (3)**

これを見て、どう思った？



瀬戸  
瀬戸に特徴的な白っぽい灰色の粘土に、深い緑色の釉薬が施されています。この作品は、瀬戸で作られてから半世紀以上経った。この作品は、瀬戸で作られたものである。



瀬戸  
瀬戸に特徴的な白っぽい灰色の粘土に、深い緑色の釉薬が施されています。この作品は、瀬戸で作られてから半世紀以上経った。この作品は、瀬戸で作られたものである。

この作品の、形・色・模様を、あなたに、どんなことを思わせていますか？

これを見て、どう思った？

この作品の、形・色・模様を、あなたに、どんなことを思わせていますか？

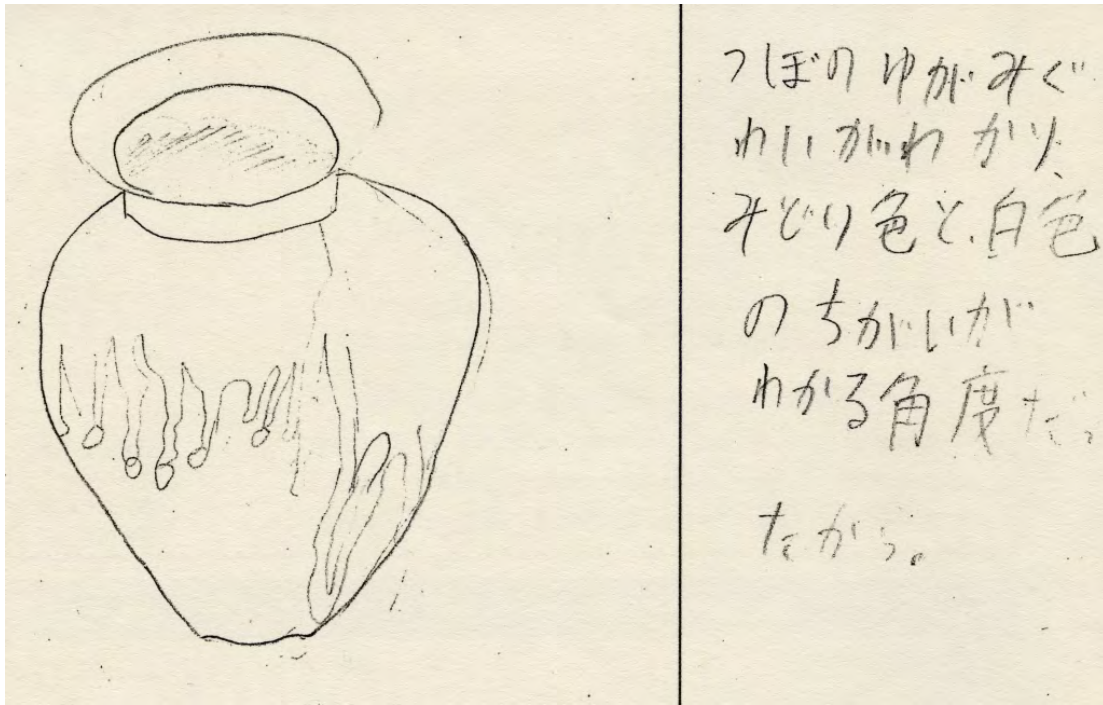
画像5 ワークシート (原本はB4横)



画像 6 授業導入部 授業概況




画像 7 展開部 1 授業概況



画像8 展開部1 ワークシート記入例



画像9 展開部2 授業概況

これを見て、どう感じた？ 


この作品の、形・色・模様を見て、  
あなたは、どんなことを感じたでしょう？

整のた形が  
いい。  
色は白くて  
気持ちがいい  
おちつく。

付き、  
いる。  
らかである。  
いるようだ。  
釉薬「灰釉」  
締め、灰釉

傷れた焼き物は 作り手の確かな技術と老

画像 10 展開部 3 ワークシート記入例

あなたは 3つのうち、どれが好きですか？ それはなぜですか？ その作品に題名を付けてみよう 

<small>好きな作品 の番号</small>	<small>題名</small>	<small>理由</small>
(3)	記録の地平線	きれいで、うらとりしてくるし 中をのぞくと地平線のようなところ から。

焼き物に名前を付けることは、昔から行われている、伝統的な鑑賞法。

画像 11 まとめ ワークシート記入例



画像 12 展示概況

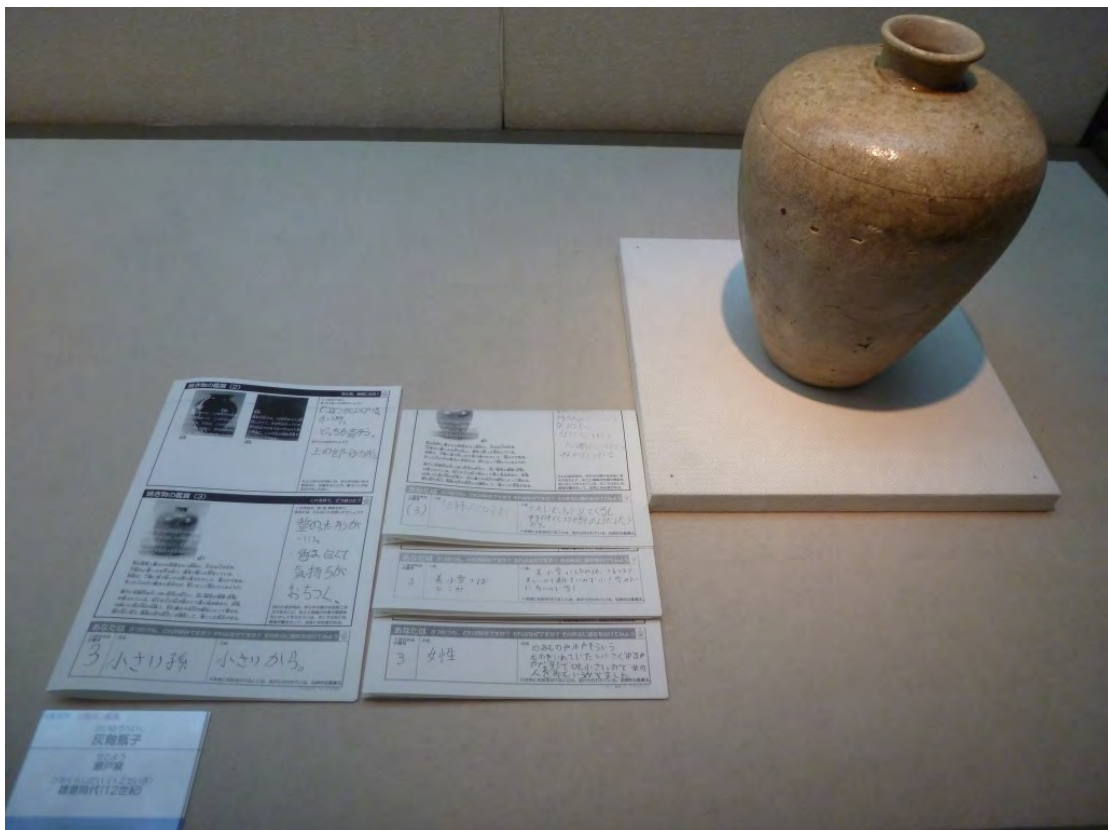


画像 13 展示導入部





画像 14 作品 1 及び児童記入ワークシート展示状況



画像 15 作品 3 及び児童記入ワークシート展示概況



ことうじ かんしょう  
古陶磁の鑑賞  
しょうがくせい かんしょうがくしゅうかつどう  
— 小学生の鑑賞学習活動 —



かたち いろ もよう  
形と色、模様をとらえて  
じぶん  
自分のイメージをもつ

学校出前講座「やきものの鑑賞」では、スケッチやメモの活動によって古い焼き物の特徴をとらえ、名前を付ける活動を通じて自分のイメージをもつ、鑑賞学習に取り組んでいる。焼き物に名前を付けることは、古くから行われている、伝統的な鑑賞法なのである。



常滑 甕 江戸時代(12世紀) 愛知県陶磁美術館  
/と同じ作品の、反対側の面



どの向きに飾る？

赤茶色の上に、緑色がかかっている。緑色は、この甕を窯の中で焼いた時に、燃料の薪が燃えてできた灰がかかって、釉薬のようになったもの。焼いた時の炎の加減によって、いろいろな形や色をしている。これを飾るとしたら、どの向きに飾るとよいだろうか？

かたち いろ もよう くら  
形や色、模様を比べる

上の甕が知多半島で作られて数十年後に、右の甕が渥美半島で作られたようだ。形や色、模様で似ているところと、違うところはどこだろうか？粘土と作り方や使い方、作り手や使い手の気持ちに、共通することや違うことがあるのかもしれない。



これを見て、どう思った？

滑らかな胴体の輪郭には、急な曲線と緩やかな曲線がある。急な曲線は力強さ、緩やかな曲線は優しいイメージを作り出している。白っぽい灰色の上に、淡い緑色の釉薬が塗られて、穏やかな雰囲気となっている。どうして、こうした感じの器を作ったのだろうか？

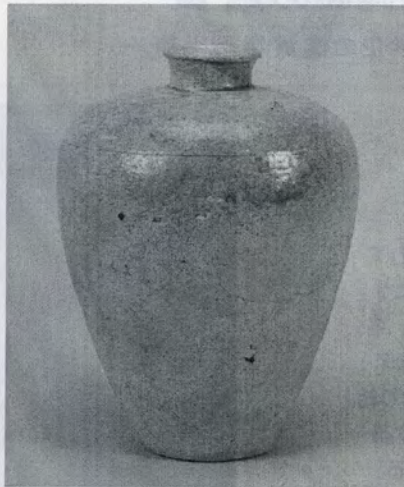
だいめい つ  
題名を付けてみよう

焼き物に名前を付けることは、古くから行われている、伝統的な鑑賞法。自分なりの名前を付けると、昔これを作った人や使った人や、飾った人や鑑賞した人に気持ちを通わせることができる。そして、この焼き物に新たな歴史を付け加えることもできるのである。



画像 16 解説鑑賞シート第1面 (原本は A4 縦)

こせと かいゆうへいし  
古瀬戸 灰釉瓶子



瀬戸 灰釉瓶子  
鎌倉時代初期(12世紀末)  
愛知県陶磁美術館蔵

優れた焼き物は、作り手の確かな技術と考え方をもとに、粘土と釉薬の性質や雰囲気をかきかきして作られている。そこでは、形と色、模様が響き合って、品格と存在感がある。そうした焼き物を鑑賞すると、センスや美意識を育むことができる。

この瓶子は、急な曲面と緩やかな曲面をもつ胴体に、小さな口が付き、力強さと優しさを併せ持つ、清楚で整った形をしている。表面は、丁寧に篋で削ったり指で撫でたりして、滑らかである。作った人の手の動きと気持ちが、形になって表れているようだ。

瀬戸に特徴的な白っぽい灰色の粘土に、淡い緑色の釉薬「灰釉」が塗られている。粘土は土の粒が細かくて硬く焼き締まり、灰釉は焼いた時の炎の加減で、色の濃さや光沢が場所によって異なる。器の形と粘土・釉薬の色や肌合いが調和して、凛とした気品がある。

鎌倉時代の武士たちは、瀬戸の瓶子をお酒の容器として使ったり、高級陶器として飾ったりした。20世紀には、日本の古い美術品として鑑賞・研究され、花瓶として使われるようになった。

今、作り手やかたての使い手、飾り手の想いを想像し、自分が共感できるところや、自分が一番心惹かれるところを探してみよう。鑑賞によって歴史を体験し、新たな歴史を創ることができるのだ。

小川裕紀 (愛知県陶磁美術館 主任学芸員)

「古瀬戸」(こせと)は、鎌倉時代初期-室町時代前期に、瀬戸窯で作られた焼き物。

画像 17 解説鑑賞シート第2面 (原本は A4 縦)